

チェンマイ大学での貢献 (39)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では「最も長い日」と題して筆者の活動の一端を紹介する。ここで言う「最も長い日」とは2017年3月13日(月)のことである。この日は朝8時から9時半まで正規の担当講義があり、11時半から約20kmほど離れたマエジョ大学からの要請で大学院学生へのセミナー講演を依頼されていた。定時に元農産工学部・学部長が車でピックアップに来てくれて、途中で昼食を取り、マエジョ大学(Maejo University)に到着するやいなやセミナー開始、12時30分から約1時間余の講義(プレゼンテーション)を大学院生20数名を前にして、行い、終了するや再びチェンマイ大学に戻る。マエジョ大学での講義を終えたのが13時40分であった。この大学には昨年(2016)も1学期の間、毎週金曜日の午前中出向き、個々の院生向けの研究論文を書くための指導、アドバイスをするべく要請を受けて通い詰めた経緯がある。しかしその時と異なり今回は20数名というまとまった数の院生を前に話す機会を得た事は特別の喜びであった。個々の学生に対するアドバイスや指導が大切であることは言うまでもないが、まずは全員を一堂に集め、講演しどこまでは会得しておかねばならない知識レベルであるか、またどの様に研究を進め、何をしなければいけないか、あるいはしてはいけないかなど共有すべき情報、知識を確認しておく必要がある。その意味で講義は重要であり、そうした基盤となる知識を会得した後に個々の院生に適合したアドバイスや指導をする方が効果は大きい。専門が異なり、研究内容もテーマも異なる院生個々に共通のオリエンテーション的な情報提供の場を設けることは極めて重要であり、また効率的で、期待される効果も大きい。もちろん研究推進の時間も節約でき全体的に研究論文の内容、質の向上に寄与する。学生本人が自ら判断して、自分に取って必要と思う時にのみ講義やイベントに参加すると言う姿勢はあまり頂けない。

まず第一にその講義やイベントに出るか出ないかを意思決定する評価基準を、知識を得ようとする側が持ち合わせているとは思えないからである。もしその様な形での意思決定が成されているとしたらその多くの学生は留年し、講義への出席率も低く、いつまでたっても卒業には至らない。タイの大学では日本の大学と異なり多くの留年生を見かける。それだけに卒業・修了することの難しさをつぶさに知るが、日本の大学では入学は難しいが卒業は一度入学すれば比較的容易との意識が蔓延(?)しているかの如きである。知識に差が出来るのは学生個人の勉強量や努力の度合いに基本的に依存するが、共通的に習得しておかねばならない知識としての水準は確保、維持させなければならない。講義はこの部分を補う役割になっているとも考えられる。単純に講義に出て教員の言うことを聞き知識とするのみならず、共に出席した仲間や友人の勉強姿勢や質疑応答により自らのレベルを認識、自覚し更なる励ましに結びつけるきっかけにもなる。確かに大学の講義は授業料を払っている以上、規定の範囲内でどの科目を履修し、またその講義に出席するかどうかは学生個人に任されている。しかし出席率が低いと中間試験や期末試験で合格点を得ることが出来ず不合格となり留年の憂き目を見る。筆者も大学の講義への出席は必ずしも義務とは考えず、学生個人が教員以上の知識を既に有しているのなら、無意味という判断もしているがそれは知識面のみを対象にした場合は問題ないものの、共通に修得維持すべき知識の共有という観点からは好ましいことではない。さらに授業の合間に教員が自らの経験をもとに話す、社会人として持ち合わせるべき社会通念や常識などを聞く機会すら逃す結果となる。同じ名称の講義科目が大学、学部に於いていくつかあるのは授業を担当する教員によりその教授法、学生との接し方、教員個々のこれまでに会得した経験や哲学によりその

講義が親しみやすくなり、そうでなくなる場合の2通りがある。簡単に言えばおもしろくなければ興味も湧かないし、勉学へのモチベーションも上がらない。教える側の講義に対する対応、すなわち熱心度、努力が受講者である学生のモチベーションを左右する。筆者はこれまでも授業がなくても必ず大学に会い、そして掲示板に行き今日ほどこの学部でどの様なイベントが催されているかを調べ、学部が異なっても自らが学びたいという強い意志があるなら担当の教員に会って話をし、お願いせよ、殆どの場合聴講のみであれば問題なく了解を得られるであろう、これが大学(University)なのであると言ってきた。「基本は自ら行動する」ことにこそ大学生として評価できると思われるが、言われるままに講義に出て、終わったら帰宅しているようでは小中学生と同じで、大学にきた目的を疑われても仕方がないと叱咤している。聴講する側の人数が少ないのも講演する側の士気を下げる。こうした観点からみても今回の多数の院生へのセミナー講演招待は極めて有意義で、益々やる気を駆り立てるものであったと感じている。

さてマエジヨ大学での特別講演は終わったが、午後の14時30分からの人文学部からの依頼でアセアン大学ネットワーク(ASEAN University Network)に関係した学生のモビリティ(Student Mobility)に関して1時間ほど講演するよう要請を受けていたので、その時間までに会場に到着する必要があった。移動の途中に人文学部長に電話連絡し、会場の詳細な位置と場所を確認してあった。人文学部長も気を利かして建物の前に待機して頂いていた。そうしたこともあって、定刻5分前に会場に到着することが出来た。講演予定者は筆者だけではなく、もう一人は前副学長(工学部)であった。そもそもこの講演依頼がきたいきさつは人文学部長と前副学長との間で持ち上がった話であり。筆者はその協力者であったが、前副学長の粋な計らいで思わぬ講演の機会を得たわけである。前副学長がアセアン大学ネットワーク(AUN, ASEAN University Network)について。また筆者がこれまで主導的に関わった国際交流プログラムである3大学国際ジョイントセミナー・シンポジウム(Tri-University International Joint Seminar & Symposium)、日本とタイの6大学との間で合意し、立ち上げた国際インターンシップ事業(International Cooperative Education & Career Development, Internship program)、米国ミシガン州立大学が企画オファーする夏期英語研修事業、アジア工科大学での経験、日本の国際協力機構での集団研修、またNPO活動としての研修受け入れ事業活動について網羅、説明した。学生交流事業の企画・実施に於いて最も肝心なことはその目的であり、「何がために、また誰のために」という部分が明確でないと実のある成果を上げることは出来ない。学生交流事業という以上は交流に必要な公式言語の修得が必修であるが、ややもすると言語修得が目的で終わってしまう事業であってはならない。言語はコミュニケーションを司る手段、道具に過ぎない。コミュニケーションが出来ても、そのスキル・レベルが理解に十分な一定の能力以上であり、自らの意見や主張、構想や理念、事業の提案や評価が出来なくては意味を持たない。専門が異なるからと決めつけず、自分の専門分野からは何が出来るかを提案する姿勢がないと、その分野は衰退し、早晚縮小、最終的には凋落し消滅の運命を辿る。3大学事業では当初生物資源学部と工学部で別々に取得した予算に基づく事業を合わせてジョイントセミナー・シンポジウムとして立ち上げたが、社会科学分野である教育・人文学部からは「われわれとは異なる専門分野であり全く関係はない」とも思われる認識から、殆ど関心もなく学生の参加応募もなかった。医学部においてすら対応は同様であった。従って後ほど別のプロジェクト(国際インターンシップ事業)で知り合った文系教員に話をした結果、ちょうど開催中の3大学事業の会場に向いて戻って来られた時、その教員は「びっくりした!、100名を超える参加者が講堂を所狭しと埋め尽くしていた、こんな大規模な事業とは知らなかった」と驚嘆の言葉を発せられたのを記憶している。その人は3大学事業が始まって以来、10年を過ぎていても一度としてその事業を知らなかったと言うほど無関心(というよ

りは無関係という認識)であったらしい。はじめからどこの学部が始めたかとかが問題ではなく、「自分の専門分野から何が出来るか」を提案、発信する姿勢がないとこうした事例のような事になる。「自ら行動する」にはそれなりのモチベーションが高くないと行動に移せない。教員がそうであると学生も同じようになる。それまで文系の学生から全く応募がなかった背景にはこうした事情があったと筆者は認識している。文系の学生が3大学事業に参加したのは、その年の中国の江蘇大学での開催からである。筆者はその年(1998)にミシガン州立大学の夏期英語研修に25名ほどの学生を引率して団長として参加した。参加学生の大半は女子学生で男子学生は数えるほどであった。その背景には学生の両親の「大学が企画実施する事業への信頼と安堵感」並びに「娘を一人で旅行させる事への不安を解消できる安心感」がそうした結果となったと筆者は感じた。そこで筆者は参加学生に向かって「英語の勉強も良いが、話が出るだけではあまり意味がないのではないか、自らの主張を英語で論文を書いて発表する様なプログラムに参加して見ないか」とけしかけた。果たして反応はすぐに現れた。しかし問題も多かった。英文での論文書きもさることながらプレゼン用資料のPPTスライドの作成は彼らにとって殆どが初めてのことであり、工学部と生物資源学部の学生の多大の協力と支援で何とか出来上がった。国際セミナー・シンポジウムでの論文発表、質疑応答にとどまらず、ホスト大学になった場合の受け入れ準備、組織としてのチームワーク体制の重要性など学生にとっては刺激的であったと記憶する。翌年三重大がホストとなった時の学生の対応は驚嘆に値するものであった。会場の設営、講演会場の照明制御、後片付け、反省会・打ち合わせ、翌日のプログラムに沿った準備、役割確認など大学として学部を超えた教育の底上げに「文理融合」という形で外部の大学からの多人数受け入れに十分に対応、寄与したと言う衝撃的な自負すら感じた。その時の素直な思いは「今の学生達は感動に飢えている、しかるべきプログラムを用意すればその可能性に上限はない」とさえ思ったほどである。文系学生の中には中国語を勉強している者も居て、その実力を確認する機会にもなったと聞き大いに喜んだ事を記憶する。また彼らの中には3大学事業に参加したことが評価されて、国の機関や大手企業への就職がなかったと言う話も聞いた。嬉しい限りである。筆者の定年退職を3ヶ月後に控えた年末の多忙な時期に10数名がわざわざ筆者の自宅に集い「お祝いの宴」と「寄せ書き」を残してくれたことは、彼ら自身も筆者以上に3大学事業に思いを馳せる場所があったのであろう。全くもって有り難い話である。未だにこの感動は忘れがたい人生劇場的一幕である。もちろんこのような結果は筆者一人の功績ではなく、もう一人の協力者である加藤征三先生(三重大学名誉教授・工学部)の支援協力があったのである。この紙面を借りてあらためて謝意を表して起きたい。

医学部については事業が掲げる人口・食料・エネルギー・環境の殆どの分野、特にエネルギーを除く全ての分野に関わる重要な学問分野である。医学部独自のカリキュラムで3大学事業への参加は難しく、特に実習を伴う授業では学生は欠席する事は許されない。従って一部の学生参加者に特別免罪符を出すことは難しいと言うのが理由であった。大学レベルの事業にするべく、度重なる要請も行い、やっと医学部からも参加者が加わり所定のレベルの事業に近づいた。この経緯の例からもわかるように、絶えず何を学生達が欲しているのか、何をすることがモチベーションを上げ、学生参加者に転機を促すのかを考え、タイムリーに魅力ある事業を大学として提案出来ることが重要である。如何に優秀な学生がいても指導が悪いとその先の目を摘んでしまう事にもなりかねない。チェンマイ大学ではGPAの最高点は4.0でありこれは履修取得した科目が全て満点(4.0)であることを意味する。推薦すればどこの大学でも受け入れてくれるレベルの成績である。しかしそうした能力を持ち合わせ、奨学金を大学が用意しても、「何を研究するか」と言う準備が出来ていないと受け入れてもらうことは難しい。修士・博士課程に進み研究するにはどのような研究をす

るか、そのための準備がどの程度出来ているか、すなわちどのくらいの文献を読み、これから勧めようとする研究の目的を明確にしているか、明確に成されていないと容易にOKとはならない。このようなことをしておけば良いのではないかと言うだけのアドバイスでなく、「これらの文献を読んでおけ」などと具体的な指示を出し、確認する所までは教員の責任でもあろう。これからはこういうことが問題になるからこういう分野の研究をやってはどうかと言うのも助言には違いないがまだまだ不十分である。日頃からそうした心構えが出来ていないと対応が難しい。奨学金供与の目処がついた時点でも受け入れまで行かなかった例の背景には少なからず教員側の適切な指導における対応の不手際、準備の不十分やまずさがあることも自覚しておくべきである。人文学部での講演では上記のことを特に強調し、モチベーションの向上が大きく鍵を握ることを説いた。

さて、この日の最後は元チェンマイ大学工学部の学生が日本の北海道大学に修士課程の院生として入学し一時帰国をしているので会いたいとの連絡を受けて、毎週行っている研究室ゼミで近況報告をしてもらおうと企てた内容について記す。従来から旧知の教授からタイの学生を受け入れても良い、優秀な学生が居れば推薦して欲しいとの連絡が入った。筆者自らが全ての資料を調べていたのでは正確な人選が出来ないこと、また指導教員を差し置いてそうした行為は慎むべきとの判断から、日頃最も活発に研究活動をしている信頼できる教員に話をした。急な話でもあったが流石に対応は素早く、履歴書、成績証明書などの必要書類を揃え連絡を頂いた教授宛に送付した。受け入れは修士課程からの入学ということで対象は、その時点で学部3年生の終盤から4年生の始まりの段階にある者という条件がついた。ノミネートされた学生は機械工学を専攻していたが、筆者と同じ農業工学を専攻していた訳ではない。指導教員が学生本人に話をし、親の同意、本人の意思確認を行い「留学」への最終意思決定と合意に基づく応募である。受け入れ予定の教授の属する専門分野は筆者と同じ農業工学分野であり、4年生での1年間を出来るだけ予備知識として農業工学を知らしむるの必要を感じ、単位修得とは無関係に筆者が担当の講義に参加、受講を勧めた。本人はまじめに出席し良好な結果を出した。自由意思に基づく受講であったから公式文書に評価が残らなかったが筆者の評価は極めて良かった。4年生での履修取得科目と評価としての単位が出そろった時点で、受け入れ予定の教授宛に公式の成績証明書を送付し評価審査を経て正式に留学が決まった。筆者が最近口やかましく「アセアンからの留学生を積極的に受け入れるべき」との主張に沿った対応に感動し心から謝意を表した記憶が昨日のようである。その学生が一時帰国しているので是非お会いしたいと言う。まさに感動である。2つ返事で研究室のゼミに出て近況を話すよう持ちかけた。PPT資料を作成し10分ほどの発表予定が30分を超えた。本来がタイ人であるからタイ語での説明は研究室の学生にはわかりやすく、気の済むまで質問が出た。彼の留学の成果次第で後に続く学生が同じような機会を得られるかどうかを強調し他の学生の興味とやる気への励みを誘った。受け入れて頂いた教授にも「ありがたい」と言う感謝の気持ちは言うまでもないがこれからの本人のがんばりと努力に期待したい。ゼミの終了後には推薦をしてくれた元指導教員と共に「今ある幸せに精一杯感謝」し更なる進展を誓いあった。こうして「この長い日」はやっと終わった。真に充実感を覚えた1日であり、人材育成に貢献したと言うより、そうした事への協力が「出来た」と言う環境に感謝したい。この年齢になって「まだこのようなことが出来るのか」と言う感謝の気持ちである。最近では「今ある環境に感謝せよ」と言うのが筆者の日常訓である。



Fig. 1 院生を前にした講義 (マエジョ大学)



Fig.2 講義終了後の集合写真撮影



Fig. 3 講義に聴き入る人文学部生



Fig. 4 講義終了後の集合写真撮影



Fig. 5 日本留学中の学生による近況報告



Fig. 6 熱心に聞き入る研究室の学生



Fig. 7 近況報告を聞く研究室学生



Fig. 8 全てを終えて夕食で一息入れる
(元指導教員と筆者、学生と研究室学生)